夕べのいろ

松岡隆子

沼の面の水泡つぎつぎ弾け夏
継ぎ接ぎの板桟橋や草いきれ
葭切や板桟橋の昏れ残り
昼顔が夕べのいろで咲いてゐて
さよならのきれいな声や立葵
月光の蒼みて烏瓜の花
折れやすき少女のこころ罌粟白し

病める子の名を形代に懇ろに

青茅の輪くぐり真つ直ぐ神のまへ

笛方の神官若き夏祓

手にうけて切幣白き夏祓

日の暮の風のあをさの名越かな

思うことがあって田無神社の名越の大祓に参列した。ちょうど神事が斎行されるところで、急いで形代に名前を書き社務所に納めた。田無神社の大祓は初めてだった。形代は水に流すものだとばかり思っていたが、田無神社では忌火で御焚上げされていた。数人の神官たちが御焚上げの火を囲み、形代に書かれた名前を読み上げながら一枚ずつ火に投じていた。

粛々とした神事に身が清められた。茅の輪を潜り、真っ先に疫病退散を祈願した。更に神様に呆れられるほどたくさんのことを祈願した。